

最新事情

ビジネススマナー教育で生徒の人間力を育み
社会へ羽ばたく力を付けさせる

高崎商科大学附属高等学校

(群馬県高崎市)

今年で創立116年目を迎えた高崎商科大学附属高等学校。普通科と総合ビジネス科の2学科を設置し幅広い教育を行っている。総合ビジネス科では、1年次から秘書検定を活用したビジネススマナー教育に力を入れる。同校の取り組みについて伺った。

人間力の伸長により 社会貢献できる人材を育成

高崎商科大学附属高等学校は、明治39年に私立の裁縫女学校として設立。学科再編や共学への移行など、時代のニーズに合わせて柔軟な学校づくりを行ってきた。現在は特別進学選抜コースや特別進学国際コースなどがある普通科と、会計コース・総合ビジネスコースがある総合ビジネス科の2学科6コースで約1350人が学んでいる。進学を希望する生徒がほとんどだが、毎年約1割の生徒が就職する。

生徒は真面目で礼儀正しく積極的。部活動も盛んで、文化祭等の学校行事も生徒会が中心となって運営する。

同校は建学の精神である「自主・自立」を教育

目標に、豊かな人間性を育み社会に貢献できる生徒を育成することを目指している。

「高校時代は子供から大人へ移行する、人生の大きな転換期。卒業後は一人の大人として自立するという意識を日々の教育で伝えていきたい」と話すのは安齊義宏校長。

「本校は面倒見のよい教職員が多いですが、生徒の自主性を重んじサポート役に徹しています。生徒が困ったり迷ったときはしっかりと向き合い適切な指導を行っています」。

昨年の文化祭はコロナ禍で中止になるところだったが、実現に向けて生徒らが奔走。教員と相談を重ねながら綿密に感染対策を行い、開催にこぎつけた。

基礎的な人間力を磨くことも同校の教育の特徴だ。「親愛・礼節・整美」の校訓を各教室に掲げて生徒の自覚を促すとともに、ロングホームルームではあいさつや整理整頓の大切さを指導している。これらの生活習慣は人としての基本的な力である。3年間を通してしっかり身に付けることで、堂々と社会へ羽ばたいていくことができるのだ。安齊校長も朝は自ら外に出て、生徒への声掛けや交通誘導を行っている。

「これからの時代は、いつ何が起きてもおかしくない、先の読めない時代です。しかしどのような状況にあっても、自分の基礎がしっかりしていれば対応できる。人は一人では生きていきませんが、周りを大切にしながら自分の存在価値を示して社会に貢献してもらいたいと思っ



とんがり屋根が愛らしい高崎商科大学附属高等学校の第1校舎



安齊義宏校長。海外で空手の指導を行っていた経験もある。元教え子が監督を務める同校女子空手部は全国大会の常連だ

ています」(安齊校長)。

ビジネスマナーを武器に 社会へ

平成23年に設置された総合ビジネス科は同校でも人気の学科だ。資格取得に強く、即戦力として活躍できる人材の育成に力を入れている。幅広いビジネスの知識や商品開発などの実践的な授業が特徴の総合ビジネスコース、簿記会計に特化し、日商簿記などの資格取得や公認会計士合格を目指す会計コースがあり、2年次にコース選択をする。

同科ならではのカリキュラムの特徴は、系列校である高崎商科大学・短期大学部との連携だ。希望者は同大・短大の授業に参加し、大学生とともに高次の教育を受けることができる。

県内の複数の企業等が行っている、イノベーション機運を高めるプロジェクトにもエントリーしている。



総合ビジネス科の田村彰康先生。「生徒が成長する姿を見ると本当に幸せな気持ちになります」

「群馬県は実は起業家が多い土地柄。生徒が提案するアイデアやプレゼンテーションにはいつも関心させられます」と話すのは、総合ビジネス科の田村彰康先生。同校で27年間にわたり生徒の教育に携わってきた。

総合ビジネス科の特色であるインターシップロも田村先生が発案して取り入れた。コロナ禍のため現在は実施できないが、例年30名ほどの希望者が参加する。「社会で働く意識を身に付けるよい機会」と田村先生。受け入れ先からの評判はよく、インターシップロ終了後、このまま就職してほしいと申し出があることも。

「本科の生徒は1年次の『ビジネス基礎』でビジネスマナーを学んでいます。基礎が身に付いているので、きちんとした敬語や失礼のない対応ができる点が、評価されているのだと思います」(田村先生)。

この「ビジネス基礎」ではコミュニケーションやビジネスマナーの学習に秘書検定を活用している。秘書検定はビジネスで必要な要素を多岐にわたり学ぶことができるからだ。実践力が

付く教材として20年以上前から取り入れており、就職活動や大学入試の面接時にも役立つことが多いという。

秘書検定への挑戦は、授業で学んだ後の総仕上げとして推奨している。生徒の多くが受験を希望するが、インターシップロに参加する生徒やすでに参加した生徒は特に多いという。インターシップロ後に受験する生徒は、実際に仕事の現場に立ったことで、秘書検定が役立つことを実感するようだ。

検定合格を目指す生徒には、田村先生が放課



ホテルでのインターシップロ



総合ビジネス科会計コースの授業風景



秘書検定受験者向けの補講授業。先生が実演を行いながら解説し、生徒の理解を深めていく

後に補講を行っている。名刺交換やお茶出し、席次など、高校生にあまりなじみのないものは、できるだけ実践的な指導を行い生徒の理解を深める工夫をしているそうだ。

入室時の声掛けやお辞儀の角度といった立ち居振る舞いも、田村先生の実演をお手本に生徒が練習する。最初は戸惑う生徒も多いが、繰り返し実践することでできるようになるという。

検定受験の最終的な目標は、単に合格することではなく、実社会での活用にあると田村先生は話す。

「生徒には、日頃から社会で必要とされる人間になりなさいと伝えていきます。マナーや礼儀はその第一歩。他人とうまくコミュニケーションを取るためのスキル。学んだことを武器にし

て、力強く社会へ出て行ってほしいのです」(田村先生)。

学びを生かして夢をかなえる

総合ビジネス科3年生の岩田優花さん、1年生の竹田鈴那^{すずな}さんは秘書検定3級を受験し合格した。二人はどのような目的で秘書検定を受験したのか。難しかったのはどこだろうか。

岩田さんは「将来は公務員になりたいと考えています。きちんとした敬語や接客ができるようになりたいと思いましたが」と話す。学習で特に難しかったと感じたのは席次だ。「タクシーや電車など乗り物の種類によって順番が異なるので苦労しました。頭の中で何度もシミュレーションを重ねて覚えました」。

竹田さんは「私もきれいな言葉遣いを学びたくて挑戦しました。ボランティア部で目上の方と接する時、正しい敬語を使っているか不安だったからです」と話す。検定を通して社会人の常識に初めて触れたそうだ。「固定電話の応答や状況に応じた上司への対応は今回初めて学びました。社会へ出る前に身に付けられよかったです」(竹田さん)。

二人が秘書検定の学びで得た一番の成果は、やはり正しい敬語が使えるようになったことだ。「演劇部の部長として後輩の指導をする際、自信を持って話せるようになりました」(岩田さん)。「家族からは敬語が上手くなったと褒めら



左から総合ビジネス科3年生の岩田優花さん(会計コース)と1年生の竹田鈴那さん。岩田さん所属の演劇部は昨年関東大会に出場。竹田さん所属のボランティア部は介護施設を訪れたり、募金活動を行う

れています。現在3歳上の姉が秘書検定を勉強中なので、敬語のポイントなどを教えています」(竹田さん)。

日々の生活の中で学びを着実に生かしている二人にこれからの目標を聞いた。

「卒業後は専門学校に進学します。授業や秘書検定で培った敬語や接客のスキルを生かし、お客さまに丁寧な対応ができる公務員になりたいです」と岩田さん。竹田さんは「まだやりたいことが見つかっていませんが、どのような進路でも検定で学んだことが生かせると感じています。できることが増えて選択肢が広がったので、いろいろなことにチャレンジしていきたい」。さわやかな笑顔で抱負を語ってくれた。